

「日本幼児保育史」研究余滴（六）

宍戸健夫

日本保育学会の共同研究として、幼児保育史研究がはじまったのはいつだったのだろうか。古いファイルを開いて、当時のプリントを見ると「研究計画（案）」が、昭和三十一年七月二十八日の日付でだされている。私がまだ大学院に籍をおいていた頃のことである。研究委員のなかには、鈴木とく氏の名がある。私は鈴木先生に誘われて、研究委員として参加したのだった。

私は学生時代、大学セツルメントの活動に参加し、保育所の仕事に協力した。そんなこともあって、卒業論文は保育所の歴史を書いた。大学では保育所の歴史について指導してくれる専門家はいなかった。私はしばしばセツルの先輩である浦辺史氏を訪ね、資料をみせてもらったり、まとめるにあたっての貴重な助言を得たりした。鈴木先生も戦前は東大セツルメントの保母として、浦辺先生とともに活動された人である。そんなことで、鈴木先生と

知りあうようになった。

鈴木先生は、今度の幼児保育史研究が、幼稚園の歴史ばかりでなく、保育所のそれも含めてすすめられるものであり、私には保育所の歴史を担当するようにということであつた。私は卒業論文が中途半端なものにおわつてしまっているだけに、共同研究に参加することで、もっと勉強することができないのではないかという期待にみたされ、参加することを承諾したのであった。

この頃、保育所史をはじめるにあたって手がかりとなつたのは、古木弘造『幼児保育史』（巖松堂、一九四九年）であつた。この本は今日でも幼児保育史全般を概観するための基本文献の一つであろうが、その内容は、一、最初の幼稚園、二、揺籃期の幼稚園、三、子守学校、四、幼稚園の発展、五、託児所及び季節保育所の五章から成つており、子守学校や保育所を幼児保育史のな

かに位置づけていた。戦前にも岩手県女子師範学校郷土室編『岩手県保育発達史』（一九三七年）や、朝原梅一『幼稚園託児所保育の実際』（一九三五年）、浦辺史『学齡前児童の諸問題』（一九三六年）など保育所の歴史にふれているものがいくつかあるが、古木のこの本ほどには体系的に述べられたものではなかった。

私はこの本を手がかりにして、保育所の歴史研究に入りこんでいくことにした。研究のためには、実際に足であるいてみることにあった。日本で最初にできた保育所は新潟市の静修学校付設託児所といわれる。古木『幼児保育史』にも「通常わが国託児所の最初のもの」と書いている。私はそこにとんでいった。創始者である赤沢鍾美は昭和十二年に亡くなっている。私はその息子さんの赤沢直二郎氏から話をきき、赤沢鍾美著『私立守孤扶独幼稚児保護会創立以来四十八年間ノ沿革概要』（昭和十年）という貴重なパンフレットをいただいた。なんでもそうであるが、ただ資料だけということではなく、実際にいってみてまわりの状況を調べ、多方面からの話をきいて、その実像が浮かびあがってくる。また、気のつかなかった資料も得ることができる。私はこのことで静修学校という「私塾」に生まれた保育所を、明治十年代に各地に生まれていた「子守学校」と結びつけた。「子守学校」は公立小学校に付設されてきたのであるが、静修学校のそのよう

に保育所として発展していくことがなかった。「子守学校」のように自然発生的に生まれた静修学校の保育活動が、なぜ保育所として発展していったのかをおさえることは今でも重要なことだとおもっている。

その後、「子守学校」の研究については、神津善三郎氏によって発展させられている（神津『教育哀史』銀河書房、一九七四年参照）。

私が静修学校のことを『幼児の教育』（第六十巻第十一号）で書いたのは、もうずいぶん前のことである。昨年、『保育専科』（フレーベル館）から赤沢鍾美のことを書いてほしいという原稿依頼があり書いた。たまたま、NHKテレビからも「教師の時間」に赤沢をとりあげたいということで、出演したりした。そのとき、赤沢直二郎氏もすでに亡くなり、今はその夫人喜美氏が園長として活躍されていることをきいた。私はずいぶんお世話になりながら、長い間、ごぶさたしてしまっていることを恥じるばかりだった。それと同時に若い研究者がもっと本格的な研究をやってほしいと願わずにはいられない。



私はこの研究をすすめていく上で副島ハマ氏からもたいへんな協力をいただいた。副島先生はまだこのとき厚生省におられた。

ヘボンの研究者である高谷道男氏がその著書のなかで、明治四年にできた「亜米利加婦人教授所」という保育施設の紹介があるというのを副島先生からきいて、ご一緒に高谷先生を訪ねたことがあった。この保育施設には中村正直が深い関係をもち、推薦文を書いているが、このことと「正木護・阿蘇教課者報告書」に出てくる中村正直の動向とが一致していることを発見したのが、同じ共同研究者の津守真氏であった。

また、副島先生が鳥取にいくというので、季節保育所の創始者・寛雄平を調べるのはこのときとばかり、私は副島先生についていっているいろいろ便宜をはかってもらった。このときは、寛雄平の研究者である田中新次郎氏にはお会いすることはできなかったが、もう一人の研究者である連仏重寿氏にあって、いろいろ話をうかがったことは大きな収穫であった。連仏氏は寛雄平の季節保育所が、明治二十三年設立説に対して、明治二十年説を提起しておられた。私には連仏氏の民俗学的な究明がたいへんな驚きであった。保育所がいつつくられたのかではなく、農民の生活をほりさげてゆけば、もっともっと前にさかのぼることができるのではないか、というのが私の受けた印象だった。であるから、『日本

幼児保育史』第二巻では、明治二十三年説、明治二十年説があることを紹介しつつも、あまりその設立年月日にこだわらず、季節保育所は「かなり早くから、ある意味では自然発生的に庵寺とその尼僧を中心に幼児たちの、あるいは子守りたちの集合所ができてきており、寛雄平は農繁期にはつきりとそれを子ども預り所として意識したのである」とした。これを書いたあとに、岡田茂「寛雄平の託児所創設の時期に関する研究」（広島女子大学家政学部紀要第四号、一九六九年）が公表された。この論文によると老人たちからの聞きこみをもとにして、「明治十三年四月から十六年三月までの間」に創設されたと推定している。これで創設期がもっと前にさかのぼったのであるが、こうしたこともあり得るのではないかと思う。

私は田中新次郎氏とも何回か手紙のやりとりをして、創設期をたしかめようとした。その田中氏も連仏氏も今は故人になられたということである。

◇ ◇ ◇

私はこの共同研究の機会に深く研究してみたいと思ったのは、徳永恕園長のいる二葉保育園であった。私の手もとに、徳永先生

を中にして副島先生と私がうつっている写真がある。おそらく、このとき副島先生に紹介されて私は徳永先生と会い、二葉の歴史をきいたのであろう。その後何回となく私は徳永先生にお会いした。たまたま、私が所属していた保育問題研究会が、この新宿の二葉保育園を研究会の会場としてしばしばおかりしたということもあって、お会いする機会があったのだ。若い保母たちとともに徳永先生の誕生日のお祝いをする会を開いたこともあった。そのときであったろうか、徳永先生の青春時代に、結婚の道を選ぶか、それとも二葉の仕事を続けるかの岐路に立たされたことがあって、考えぬいたすえに仕事の道を選んだことをはなされた。明治以来、野口幽香に「二葉の大黒柱」とよばれてきた徳永先生である。私たちは先生の人間的な苦悩をかいま見るおもいでであった。

二葉は明治三十三年一月に二葉幼稚園として開園し、大正四年になって、その名称を二葉保育園と変更している。この歴史的な意味はきわめて重要であろう。『日本幼児保育史』第二巻で二葉のことにふれながらも、このような変化にいたる過程を十分明らかにしているとはいえない。もっと、社会・経済的な背景から二葉保育園研究をやる必要がある。それと同時に、二葉を支えてきた徳永先生への魅力は大きなものがある。私は二葉保育園研究と

いうよりも、徳永恕研究をやってみたいと、何回となくおもった。そういえば、私たちの幼児保育史研究の最大の欠陥は、幼児保育を支えてきた保母の生活と思想がほとんどふれられていないことであるといつてよいかもしれない。



私は古木『幼児保育史』を手がかりに、実際に保育所がつくられたその地について調べようとしたと述べた。それで、よい資料もみつかり成功することもあるが、そううまくいくとは限らない。むしろ、全く無駄骨折のようになってしまうことの方が多いのではないだろうか。

たとえば『幼児保育史』に炭坑附設の託児所が「明治二十九年に福岡県三井田炭坑に開かれた」とある。ここで三井田炭坑とあるのは三井田川炭坑の誤りであろうと考え、福岡県の三井田川炭坑にいつてみた。日本保育学会山下会長の依頼状のためか、会社側はたいへん親切にしてくれ、何くれと便宜をはかってくれるのであるが、この炭坑で明治時代に託児所がつくられたという資料は何も出てこなかった。

古木氏はこの部分の叙述の根拠を何も示していない。朝原梅一

『幼稚園・託児所保育の実際』が、同じように「福岡県三井田炭坑」となっているので、そこから引用したのではないかと思われる。それでは朝原の場合は何を根拠にしたのかというところも不明である。杵淵義房『本邦社会事業』（大正十一年）に同じような記述がある。しかし、ここでは「二十九年の三井田川炭坑（福岡）」と正しく三井田川となっている。朝原がミスプリントを犯したのを古木氏がそのまま使ったのではないかと思われる。

このような工場・鉱山附設保育所の場合、それを確かめる資料が残されていることが少なく、正確を期するのは困難をきわめられた。明治二十七年に東京の大日本紡績株式会社の工場内に設けられた託児所（古木）というについても、私は『日本幼児保育史』第二巻で、『江東区史』（一九五七年）を手がかりに、東京紡績株式会社ではなかったかと指摘した。しかし、『江東区史』は比較的くわしく、この頃の工場附設保育所にふれているものの、その根拠を示していない。いちど、執筆者に問いあわせたいとおもいながら、そのままになり、心のこりとなっている。



もう紙数がなくなってしまうので、大正・昭和の保育所研究につ

いて一つ一つふれる余裕はなくなってしまった。保育所史の研究は重要であるにもかかわらず、十分に研究されておらず、また資料の収集・整理の段階であるといつてよいであろう。私たちの共同研究も長い時間をかけたにもかかわらず不十分なものになってしまった。地方史の発掘をもっと大勢の力ですすめていくことが大切なことであろう。

資料の収集と同時に幼児保育史における保育所の歴史的位置を理論的に明確にされなければならない。それもこれからの仕事である。私はヨーロッパにあらわれた複線型教育制度 (dual system) が、日本では幼児保育制度のなかで典型的にあらわれ、今日でもなお存続しているのが幼稚園・保育所の両制度であると考えている。労働者大衆の生活に密着して発達してきた保育所がどのような歴史的發展をとげるのか。国民的な幼児保育制度への展望をきりひろくことに、私たちの歴史研究も前進させていかなければならないと思う。

（愛知県立女子大学）

